



こうはるとぜんしゅうだいよんかん
耕治人全集 第四卷

一九八九年一〇月三〇日発行

著者 耕治人

発行者 株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二―一―二

電話東京二五局四五〇一（代表）・四五〇三（編集）

振替東京六一六二七九九

堀内印刷・牧製本

© 1989 Yoshi Kô

Printed in Japan

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めてください。

（検印廃止）落丁・乱丁本はお取替えいたします。

耕治人全集

第四卷

江苏工业学院图书馆
藏书章



晶文社

監修

中川一政

本多秋五

編集委員

紅野敏郎

中島和夫

保昌正夫

村上文昭

題字

中川一政

ブックデザイン

平野甲賀

『耕治人全集』第四卷・目次

平林さんの体

7

母の霊

37

海からくる風

100

二十年の糧

154

小さな願い

185

なにかに祈って、
これを書く

妹

331

一度だけ会った叔父

383

雨ふり 風吹きて

408

はらからの歌

442

赤い美しいお顔

475

天井から降る哀しい音

521

どんなご縁で

564

そうかもしれない

593

解説 鶴見俊輔

625

平林さんの体

一

養女の新子さんが結婚することになったから、媒妁人になって貰いたいという平林たい子さんから電話があったのはその年の八月はじめのことだ。その時平林さんが死を迎える準備はそれで一応ととのったような気がした。目出度い話に不吉なことをいうようだが、私共のようにのんびんだらり暮しているものと違い、平林さんほどの人が死期を覚らないはずはないのだ。

新子さんの縁談のことを、平林さんの口からはじめて聞いたのはご主人だった小堀さんの追悼会の席上で、もう大分前のことだ。主催者は誰だったか忘れてしまったが、私と家内宛案内状がきて、私だけ出たのだ。

四十人ばかりの出席者のなかで、私が知った顔は三四人だった。司会者の指名で小堀さんの思い出話をしたが、なかには政党の幹部もいたし、大臣の経験者もいた。ひと通りすんだところで、平林さ

んはわきにいた新子さんを見ながら、結婚させたいと思っているから、いい人があったらお願いしますといわれたのであった。

新子さんは小堀さんの姪で、平林さんと小堀さんが睦じかった頃、養女にされたのだ。

その追悼会には新橋の或るビルにあるレストランで開かれたのだが、二人のあいだがしっくりしなくなってから離婚しその後小堀さんは亡くなったのであった。平林さんには小堀さんに対する償いのような気持ちもあったようで、新子さんを可愛がり、育てられた。

しかしその時は平林さんが死期を考えているなど私は毛頭思わなかった。そんな考えは全然浮ばなかった。

追悼会のあとどんな縁談が平林さんのところへ持ち込まれたか私は知らない。新子さんは結婚する様子はなく、私立の絵の学校へ通っていたが、そのうち勉強のためパリへ旅立った。

半年ばかり滞在したが、そのあいだ私共は何通かの絵葉書を貰った。絵が面白くて、結婚する気はないのだろうと思うことがあった。

パリから帰った新子さんは平林さん宅から近いアパートに部屋をかりた。その部屋と平林さん宅を往き来するような暮しだった。平林さんも結婚のことは忘れたようだった。

ところがその年の正月私共が年賀にいった時それを持ち出された。新子さんは暮から旅行に出掛け留守だった。

実はこの一、二年死期を予期したようなことがいくつあった。前の年のことだが、平林さんが兄さんが胃ガンで手術することになったので、S総合病院の、院長を紹介してくれという電話があった。

兄さんとは平林さんが以前住んでいた家（中野・江古田四ノ一五五番地）で、はじめて会った。平林さんはその家にいたときすぐそばの土地を買って、のちそこへ家を建てた。それが四ノ一五五九番地（後町名、番地が変った）の家で、現在の住いのわけだが、そこでも何度か会った。しかし話したことはなかった。

品川あたりで息子さんと暮しているということだったが、胃ガンのことは知らなかった。

私がS病院に三月ばかり入院したのは心臓と神経障害のためで、退院して間もなく、その電話だったのだ。S病院の院長は手術の腕がすぐれていることは他の患者や看護婦からたびたび聞いたから、家内に話したことがあった。

私の入院中も家内は時々平林さん宅へいったが、或る時その話をした。それを覚えていられたのだ。平林さんは癌研に入院し、乳癌の手術をされたことがある。それは兄さんのことで電話された時から四年ばかり前のことだ。

だから癌についての、くわしい知識を持っているはずだった。

S病院は、四階建の病棟が三つある大きな病院だが、公立だから、入院料は高くない。しかしそのため私に頼まれたのでないことは、はっきりしていた。

兄さんの治療費はずっと見てこられたようだし、そのほか毎月いくらかの金を渡していられるようだった。

S病院は、平林さん宅から、西武新宿線を利用して二十分位でゆける、近いということもあったかもしれないが、私はやはり死の予感とかかわりがあるように思われたのだ。

平林さんのように社会的地位の高い人には、私のような一患者に過ぎなかったものより、はるかに有力な紹介者があるはずだった。

私に頼まれたのは、兄さんの意志でないことは分っていた。

癌研に何カ月か入院していたあいだくさんの病人を見、どこで手術しても直るものなら直るという考えに到達されたのだろうか。

家内はS病院の院長と何度も会ったことがあるし、都合のよいことに私が入院していたあいだ総婦長と親しくなっていた。

それで平林さんから電話を受けた翌日、S病院に、家内とゆき、まず総婦長と会った。総婦長が、院長のところへ連れていくてくれた。院長はもちろん平林さんの名前を知っていた。そのせいもあったことだろうが、幸い空いたベッドがあつて、入院出来た。

兄さんは手術を受け、経過は順潮で、二カ月ばかりで退院された。

兄さんが入院していたあいだ家内は見舞いにゆき、帰りに平林さん宅に寄ったときのことだが、自分の遺産のうちから兄や甥、姪などに金を渡したいこと、それから文学賞を作りたいこと、老人の福祉のためいくらかの寄附をしたいことなど語られたのであった。

私はいよいよ死を迎えるため準備をされているという印象を受けたが、それから四カ月ばかりして、遺言状を作られた。平林さんの身の廻りの世話をしている人と家内は、平林さんにお供して国電中野駅近くの、公証人役場へ行った。そこで二人が立会人になり、正式の遺言状が作成されたのであった。そのなかにもちろん新子さんに関するものも含まれていた。

二

だから年賀にいった際も追悼会の席でも同じ縁談ではあるがまるで違ったものに私は受取ったのだ。この世にいる時期をどれ位と考えられたのか分らないが、残っているのは新子さんの結婚だけのようないきがしたのであった。

私共は平林さんがあと十年も二十年も三十年も生きてくださることを願っている。なにかとお世話になってゐる私共としては心の底から願っている。しかしそれを平林さんに言ったところでなんになるう。

私共が長生きしていただかなくてはと話合つたのは事実だ。公証人役場から帰ってから家内は、遺言状を作ると、反って長生きするそうだからと、いつていたのであった。

世間の狭い私共だが、縁談を頼んでくださって有難いと思つた。私共に頼まれた位だから、何人もの人に頼まれたに違いない。しかしその人達が見つけてくれるだろうなど言っておれなかった。

家内と相談してゐるうち私の頭にRのことが浮んだ。

「R君はどうだろう」

「Rさんならいいわ」家内も賛成した。

Rは私の出身校のはるか後輩で、学生の頃時々訪ねてきたし、卒業して会社に勤めてからも時折やつて来た。物腰、言葉遣いなど、ちゃんとした家庭の出であることが分つた。彼の実家は、岩手県の

田舎だ。

新子さんはいつのまにか三十近くなっていたから、年齢的にも恰好の縁談に思われた。

私はRを家に呼び、彼が独身であることを改めて確めてから、新子さんが貰われてきたときから私共が知っていること、平林さんの著作権を受けつぐ人であることなど話した。平林さんの著書を読んでいたから、平林さんが立派な人であることを説明する必要はなかった。私はこれから一緒に平林さん宅へ行こうと言った。

黙って顔を伏せ、私の話を聞いていたRは、重い口を開き、

「釣合わないですよ。身分が違います」とボソッと云った。

なにを言うか、平林さんはなるほど身分は高く、富もある。しかしそれは戦後のことで、食うや食わずの時期もあったのだ。平林さんに対し、身分が違うなど言い出すのは、おかしいじゃないかと私はまくし立てた。

わきから家内も、「会うだけ会ってご覧なさい」とすすめたが、Rは肩を落とし、顔を伏せたままだ。もしかしたら私に言えない事情があるのかもしれないと思い、あきらめた。

これがまとまったらどんなにいいだろうと思っていたから、がっかりし、平林さん宅へ行きにくい気がし、日が経った。

しかし放っておけないから、家内が、お詫びにいった。折角のお話だったのにと、家内が言いかけたら、新子さんが、バリ滞在中知合ったT氏とのあいだに結婚の話が持上った。新子さんにその気があるらしいことを知らされたのであった。

新子さんがバリから日本へ帰ったあと、T氏はバリに残り、昨年の暮帰国したが、それから新子さんとの交際がはじまったのであった。

私もT氏の名前は聞いたことがあり、なんとなくT氏と結婚するような気もしたのであった。

その後話がすすみ、平林さんがT氏と、氏の両親を新宿の料理屋へ招待されたことを、家内が、平林さん宅の女中さんから聞いてきた。それが五月頃だったと思う。

トントン拍子で話が進んでいるようだから、式を挙げることになるだろう。私は、平林さんが、亡くなった小堀さんに対し、意地になっていると思うことがあったから、小堀さんに対しても、豪華な結婚式が挙げられるに違いないと思った。

追悼会に出ていた地位のある人、有名な人の顔が浮んだ。平林さんは一五五番地の家（それは大谷石の塀に囲まれた広い家だった）にいたあいだ文化活動のための委員会作りに働いたことがあった（このことについては後で又書く。）政党に関係したこともあった。だからどんな高位、頭官でも媒妁人に頼むことが出来るはずだった。

私共は平林さんにこれから先何十年も生きていて貰いたい、その願いとは別に、死期を覚悟されているのは事実のようだから、その式が、平林さんの最後を飾る華やかなものになる気もするのであった。

その式場に、私共は呼ばれるだろうか。式場での平林さんを遠くからでも見たいものだ。しかし呼ばれても着てゆくものがない。

そんなことを考え日を過ごしているうち冒頭にかいたように八月に入って媒妁人依頼の電話だった

のだ。私の名前を確めるなり、腹に響くような声で、言ったのだ。

私はあのRのように、お受けするような身分じゃない、荷が重過ぎると、ボソボソ言ったのであった。

私は平林さんが直接電話をくださったと書いたが、長いあいだ近所に住んでいても、平林さんが自分から電話をくださったのは、兄さんのことが、はじめてだった。だから媒妁人の電話は、二度目ということになる。しかも二度とも身内のことだった。

私は平林さんの仕事の邪魔になるのが心配でなるべく訪ねないようにしていたが、平林さんが恐くもあったのだ。近より難い気がした。しかし家内は至って平気で、訪ねると、長い時間帰ってこないことがあった。どんな話をするのか尋ねてみたことがあったが、普通の世間話だといった。文学など分らぬ家内のことから、そんな話しかないわけだ。

なにかの都合で、家内が顔を出さずにいると、家政婦や女中が、平林さんに代って、電話をよこすこともあった。ついでのとき、寄ってくれというのだ。

稀には平林さんが電話されることがあったが、きまって家内への電話で、私もそれを知っていたから、「平林です」といわれるなり、家内を呼びますからといい急いで電話を離れた。家内がいなくてきは「帰ったらすぐ伺わせます」といったのだ。

平林さんはそんな私を知っているから、私が引込まないうち、私の名前を確めるなり、いきなり用件を言い出されたのであった。私はその平林さんの気持を有難いと思うと共に、二度の電話に、二度とも私がすぐ出たのを、偶然とばかりいえない気持にもなったのであった。

そして平林さんが自分の方から、私に近づいて来られたように感じ、そのことでも死期を覚られたように思うのであった。

その電話が切れたあとで、私は改めて私が始めて平林さん宅を訪ねたときからのことを、辿らないではいられなかった。翌日も、その次の日もそのことを考え続けたのだ。

平林さんは、豊島・千川にいたとき、小堀さんと共に、小堀さんの弟の娘である新子さんを貰い受けるため、福岡まで旅した。

当時私共は豊島・長崎にいたが、そこから歩いて十五分位だった。戦後の出版ブームで生れた出版社の一つに、家内は働いていたが、そこで平林さんに原稿を頼むことになり、家が近いというので、家内が訪ねてゆき、それを機会に度々訪ねるようになった。

家内がお世話になっているから、私もお礼をかね訪ねたが、なか睦しい平林さんと小堀さんは、新子さんをともない、甲府市湯村温泉へ旅されたことがあった。その常磐ホテルから、平林さんのお便りをいただき、親子揃って湯治している姿がうかがわれ、私はひとりでに微笑が浮ぶのを覚えたのであった。

その時分からの縁だった。豊島・千川の家にいるとき、一五五四番地の、大谷石の塀に囲まれた家を、土地ごと買ったのだが、その後私共も豊島・長崎から、引越さねばならない事情がおき、方々探し廻った末、中野・野方へ越した。平林さんの近くに住みたかったためではない。それは偶然だったのだ。

媒妁人依頼の電話は、午後の三時頃だったが、外出していた家内が、おかずなど買って帰った時知